



QRコード⑮

【道するべ⑮⇒道するべ⑯100歩】

真っ直ぐ東へ100歩。三差路があり左へ。道するべ⑯が。

道するべ⑮から⑯は豊前街道を歩く。橋津の昔の白壁街(酒屋4軒醤油屋1軒)だ。今では3軒だけ屋敷が残り、住んでいるのは2軒、営業は豊国屋酒店だけになっている。

ここは橋津町ん撮影スポットじゃなあ



「思春期の伊藤博文」が 橋津の町へ時々来ていた？ 事実でしょうか？

思春期の伊藤博文(13歳~15歳)が現在の豊後高田市で働いていた。

「名を「俊助」(利助)と言い、・・当時の芥屋長左衛門方に酒の倉子として3カ年働いていた。読み書きが好きで習字紙三しめを一度に買っていた。」

この人物が伊藤博文というのである。【豊

後高田市明治百年編纂委員会による歴史書「豊後高田市明治百年」より】

芥屋とは高田の商家馬場家であり、伊藤博文(俊助)が3年間酒の倉子として働いていた時、橋津の酒屋から馬場家に嫁入りしていた奥さんがとても可愛がり、奥さんの里の橋津の酒屋(木下)に、時々奥さんと共に木下家に出入りしていた(遊びか、酒屋の手伝い)というのである。(橋津の歴史に詳しい、木下酒屋の末孫、松本晴一郎氏より聞き取り)

伊藤博文は、農民の子として生まれ、父が破産となり母の基での生活や、幼年期から思春期にかけては苦勞の連続が読み取れる。その後父の養子縁組等を得て、武士の足輕の身分を得て、安政4年吉田松陰の松下村塾に入門する。伊藤は身分が低いため、塾の敷居をまたぐことが許されず、戸外で立ったまま聴講していた。(ウィキペディアより)とある。

豊後高田市の歴史書「豊後高田市明治百年」によれば、安政元年から安政3年の3カ年13歳から15歳までいたとあるので、松下村塾入門の前年まで豊後高田市で働いていたことになる。貧しかった伊藤だけに考えられる。

伊藤博文がその後、橋津を訪れている事実、また伊藤博文の書が橋津の松本晴一郎氏宅にあることから、思春期の橋津の町での思い出は、馬場家の奥さんから可愛がっていただいた思い出として、伊藤博文にとって、とても大切な思春期の一ページであったのかもしれない。

次ページは新聞記事になった伊藤博文の書

クイズ14 第一次伊藤内閣の偉業とは何か。

クイズ13の解答(吉田茂 5回)

伊藤博文の書 宇佐の旧家に2作品 首相退陣後の心境託す /大分

毎日新聞 2018/11/3 地方版



日本の初代総理大臣・伊藤博文（1841～1909年）が書いた書の2作品が宇佐市の旧家に残っていた。

第3次伊藤内閣の終了後、県内を遊説。その際、古くからの知人だった松本家を訪れ、書をしたためたらしい。三浦梅園資料館（国東市安岐町）の専門委員の岩見輝彦さん（63）は「両書とも、伊藤博文の雅号・春畝（しゅんぼ）が印刻とともに入っており、伊藤の書に間違いない」としている。

作品の一つは「隴畝秋高孤鶴拳松林月上臥竜

横（畝に秋は高し 孤鶴の拳がるを 松林に月上って臥竜横たはる）」。伊藤が首相を辞め、野に下った心境を詠んだ「風雲一擲憶淵明」の書き出しで始まる自作の漢詩の一部を書いた大作（横180センチ、縦60センチ）で、宇佐市橋津の松本晴一郎さん（86）が保存していた。



もう一つは、伊藤が、江戸中期の儒学者・三浦梅園（1723～89年）から5代目にあたる人物（松本家からの婿養子）のために書いた「梅園」（横80センチ、縦37・5センチ）。7代目主人が保有しているもので、現在、修復のため松本さんが一時的に預かっているという。

的に預かっているという。

伊藤は遊説中の1899（明治32）年5月17日、松本家に立ち寄り、書いたとみられる。力強い筆致は、首相を辞しても、まだ力は衰えていないことを誇示しているようだ。

松本さんによると、伊藤は10代のうちの3年間、豊後高田の造り酒屋で奉公していた。松本家はその酒屋と親戚だったため、よく松本家に入りしめていたという記録が松本家に残っている。

伊藤は政治的な巻き返しを図るため、同年5月15日の大分市を皮切りに、別府や中津、福岡県行橋、久留米、門司など九州北部を精力的に回った。憲政や日清戦争の話などを熱く語ったという。旧東京日日新聞（現毎日新聞）は、当時の遊説の様子を「伊藤侯演説集」（日報社発行）としてまとめ、新聞の付録に付けた。

【大瀧実知朗】